和田合戦のきっかけ
「鎌倉星月夜　朝比奈・松島恋物語」

講談師　一龍斎貞花

荒夷といわれた東国武士も、鎌倉に幕府が開かれるや、都の気風になびき、ことに和歌の名手三代の将軍源実朝、月に一度お歌の会を。ある月の会に第一位に選ばれた奥女中取締役局松島。年の頃十九か二十歳。実朝が松島のことを、

「都育ちの嬋娟たる手弱女」と、あでやかで美しく上品で奥床しい女性と評しています。

この松島を見初めたのが、執権北条義時の次男名越次郎朝時。恋文三遍送るも開封せず突き戻され、

「我は執権の次男、奥女中に恥しめられ、やはかこのままに捨ておくべきや、強いてなりとも従わせてくれん」

廊下を行く松島が手にせる雪洞を叩き落して闇となし、その場に押し倒しあわや無態の振舞いに及ばんとした。この危急を救ったのが、その夜の宿直所司の別当職和田左衛門尉義盛の三男朝比奈三郎義秀。鎌倉随一の豪傑義秀、灯りを消して闇となし、

「御身らを問注所へ引立てなば不義の大罪まぬがれまいが、武士の情をもって見逃し申す。暗き処へお連れしたなれば何人なるや面体わからず。以来何処に於いて出逢うとも恥しきことの候わず。即退散なされよ」

虎口を逃れ立ち戻った松島、

「なんと情の深いお方であろう。ご武勇といいお人柄といい、女と生れた冥加にはこういう人と添い遂げしなば、いかばかり幸せであろう」

感謝の気持ちが恋心と変わり、今度は松島が手紙を義秀に。

「さてはあの時の女性は松島であったか。灯りを消して顔を見なかった」

恋文らしきことは書いてありませんが、最後に一首歌が。

〝張りつめし胸の氷の苦しさを
朝日に解くる折を松島〟

意味がお判りにならない方がいらっしゃるかもしれませんで、都々逸に翻訳すると、

〝ほれちゃいるけど言い出しにくい、あなたの手出しを待つばかり、アーコリャコリャ〟と、なるんだそうで、

朝比奈、歌の意味はすぐに分ったんですが、そのまま返事もしたためず捨ておきました。

五・六日たつと又一通、これまた取りっ放しに。サァこうなりますと松島気が気でない。以前自分が朝時に取った態度と同じになってきた。

三度目の正直と、いら立つ思いで書きあげました玉梓。今なら女性に対しなんと失礼なと思われるかもしれません。

「かくばかり心をわずらわせているは、気の毒のいたり」

と、今度は心を動かしました。

私ならすぐに誘うところですが、朝比奈ほどの人物になると考えが違います。なお一歩退って松島を色々考察してみますと、なに一点非の打ちどころが無い、生涯苦楽を共にする妻として恥しからぬ女性と判り、心を燃え立たせます。しかし身分もあり万事に物固い昔のこと。自分勝手に妻を決めるという訳には参りませんで、思案にくれた末、兄の和田新兵衛友盛に、今までの一部始終を詳しく物語り、

「未だ定まる縁なき三郎、松島を妻に迎えたく存じ、願わくばこの由お兄上よりお父上へお取り持ちを」

と、道を立てての話、兄知盛もことのほか感心をして早速父義盛へ。女から恋文などふしだらと思われてはいけないと恋文のことは一切ふれず弟義秀の妻帯の儀を申し入れてやります。

「ウム、お前が左程に申すようなればこりゃ結構なる縁と心得る。しかし先方松島がどのように想うておるか調べてみねばならん。まず御台様にお頼み申してみよう」

義盛、恋文が三通も来ているとは知りませんから、早速尼御台政子へ、

「松島の気持ち何卒お聞き下さりますよう」と、お願いをした。

直ちに松島をお召しになりました尼御台。

「これ松島、そなたは最早縁を求めてしかるべき年頃。わらわが良き若者を媒酌致してとらせるが、そなたの考えやいかに」

「ハイ、有難きお言葉にはございますが、して何人（なんぴと）よりのお求めにございましょう。まず伺いとう存じます」

松島も中々用心深い。承知しちまってその相手が朝時さんと言われたら大変と、一応伺ったのは行き届いたもの。

「和田義盛の三男、朝比奈三郎義秀である。どうじゃ二世を交わする夫として恥しからぬ者であろう」

「ハ、ハァーイ」

余りのうれしさに松島、それへ平伏致しましたが、顔は龍田（たつた）の紅葉（もみじ）のそれならで。

講談は文学的でございますでしょ。顔の赤くなったのを龍田の紅葉のそれならでと。

しばしお答えも致しかねて顔を上げることが出来ません。

「これ松島、応ずるやいかに」

「ハイ、御台様の御意、有難く頂戴つかまつります」

この一言が精一杯。ニッコリと微笑まれた御台様。

「しからば、わらわが媒酌致してとらせるであろう」

サァー松島の喜びいかばかりでありましょう。

今は、松島を想う朝比奈とて同じこと。

ここにいよいよ黄道吉日（こうどうきちにち）を選びまして、二人が華燭の宴を上げることになりましたが、これが無事にすめばこのお話も目出度し目出度しで終るんですが、しかるに月に村雲、花には嵐のたとえ通り、かの名越次郎朝時がいたくこれを恨みまして再度松島に対し、恥し目を与えんと致しました。

朝比奈とて黙ってはおられません。

それがため鎌倉営中に大騒動がまき起り、この結果尼御台が朝比奈と松島の縁を絶ちまして、なにしろ政子にしてみれば、甥の朝時のこと、それほどまでに思いつめているならばと、強いて朝時の室となさんと致しましたところから、遂に松島が、

〝ありし夜のうすき縁（えにし）をいかにせん
君忘れめや　のちの契りを〟

と、一首の辞世を朝比奈の元へ残し、十九歳を一期として自害して果てました。

義秀愕然と致します。

心に決めた松島の自害、その胸中いかばかりだったことでございましょう。

これが一つのきっかけとなり、執権北条義時は、有力御家人和田義盛を滅す絶好の機会と、義盛に謀叛の疑いありと義盛を挑発。かくして和田一族と北条一族が戦う和田合戦。

鎌倉随一の豪傑朝比奈三郎、鉄の門（くろがね）破りなど幕府方に敵しうる者がなかったと。戦場から船で安房に逃れたと申しますがその後は不明。一説には戦場で討たれたとも、また戦いの後朝鮮に渡ったとも、英雄なればこその伝説です。狂言「朝比奈」などで後世に武勇を謳われます。

北条義時は合戦に従軍は少なく、鎌倉殿頼朝の側近として補佐し、頼朝亡きあと承久の乱の過酷すぎる戦後処理。政子と共に父時政をも追放、御家人は権力争いから互いに滅び、二代執権として基盤を創り上げるため冷徹な処置によって本格的武家政権を確立し、承久の乱からわずか3年後63歳で死去。

後継者倅の三代泰時が名執権といわれる手腕を発揮し北条政権の時代を形成したのでございました。